

漢法苞徳塾資料	No. 172
区分	証関連
タイトル	撰穴・取穴小委員会の討論から 夏期合宿塾長講話（日本経絡学会理事会任命）
著者	八木素萌
作成日	1991.08

◎鍼灸治療学の土台の構築のために

- 【1】鍼灸術は『内経』を見れば判かるように古代においては医術の中心に位置していた。湯液による治療が歴史の経過とともに次第に医術の中心の位置に立ってきたが、それにも関わらず鍼灸術は依然として極めて重要な医術であり、広範な適応症を持っている。
- 【2】近代日本において鍼灸術に社会的な威信を回復しようとして相当程度に大きな役割を果たしたのは、何と言っても「体系的な治療医術」でなければ反応点療法や「家伝の秘法」療法やでは『医術たることを主張出来ない』『効果があったと言ってもそれでは偶然のまぐれ当たり過ぎない』『鍼灸は鍼灸の医学に基づいて行なわれなければならない』と主張して『古典の批判的摂取』『古典に還れ』と叫んだ柳谷素霊・竹山・井上・本間等諸先生を中心としたグループであった。その提唱した治療体系が『経絡的治療』『経絡治療』と呼ばれた事は周知の事である。
- 【3】これが提起されてから既に50年を経過した。その歴史を概括してその歴史から学んで、さらに治療水準を新段階に引き上げようとした『自己検討』の討論が、『日本経絡学会』における『鍼灸における“証”について』を主題として展開されている議論である事も周知のことであろう。
- 【4】88年89年90年の討論を通じて、『経絡治療』方式のスタンダードが確認されると共に、そこに含まれている問題点も指摘された。あと2回の学術大会の討論は、もっと明快に問題点と解決の方向性を示すことになるだろう。我々は臨床家として討論の結果を、受け身の姿勢でただ待っている訳には行かない。むしろ、積極的に討論に参加して自らの積極的関与を通じて、新しい展開を形成してゆく主体的な参加者にならなくてはならないものであろう。そのような積極性こそは自己自身を鍛え上げるものとなるだろうからである。

◎何が実践的な問題か

- 【1】『経絡治療のスタンダード』に存在していた問題点として討論の過程で明らかになった、問題点とは

- (イ) 四診総合による「證」決定という建前も、実は「六部定位比較脈法」の判断が主導的になっている。しかし、この「六部定位脈診」は有効性が限定的なものであり、病因や病の内外やの診別が困難であり、また複数経に反応している場合も把握しにくい。
- (ロ) 「證」は主として経脈の虚実の判断を示しているが、その判断も「六部定位脈診」に基づいている。そして、その判断に従って、手足の要穴を用いて補瀉して、これを「本治法」と称している。この「本治法」から外れる部分の用穴運用は「標治法」としている。ここには2つの問題がある、一つは「脈の虚実」と「病の虚実」(大過・不及と表現すべきである)と「切経による経脈の虚実」とは、何時でもイコールであると言う前提に立たなければ、『経絡治療』のスタンダードは破綻するということであり、二つには「本治法」は「本を調える」意味も含んでいるならば、手足の要穴の運用のみを「本治法」と称するのは問題である、治病の基本的な撰穴・配穴・主穴の問題を『経絡治療』の標準的方式の独特の「本治法」「標治法」概念にする事によって、治療経験を学術的検討の対象にし難くした事である、そして、このように「本」「標」とした為に「脈・病・経」一致の前提が持っていた論理的弱点も押し隠された事になっていたのである。
- (ハ) 「経絡の虚実」として把握した表現としての「證」概念の見直しの必要性が明確に提起された。
- (ニ) 診断が六部定位脈差診の主導型である事を反省して、四診総合型に方法を転換する事、従って、脈状診を重視すべき事、腹診、舌診も採用しなければならない事などについて、反論する者が居なくなっている。
- (ホ) 「標」「本」概念の見直しの必要性も提起されている。
- (ヘ) 撰・配・取穴の原理についても「69難」原理を主としたものを、大幅に拡張する必要も論議されている。これに関連して、刺絡の重要性、穴性研究の組織的取組みの必要性も提起されている。

総括的に約言すれば、鍼灸と東洋医学に対する社会的期待と関心の高まりに応えようとして、オーソドクスな伝統を担う誇りに掛けて、オーソライズに大幅な展開をしようとしているのであり、その為にも治療範囲の拡大と治効の奥行の深化を達成しようとし始めたのである。

こうして「学会」の「常任理事会」は「鍼灸の社会的役割と展望」「脈診問題」「腹診」「舌診」「證」「取穴・配穴・撰穴」「教育・教科書問題」などの小委員会を組織した。また、会外からの識者も加えて諸研究グループの主要なメンバーによる「證問題討論合宿」も開催して、活発で率直な意見交換を行なった。

- 【2】私は「取穴・配穴・撰穴問題小委員会」の責任者になって、2月以来その討論を主催して来た。そこでの討論に関連している事項を報告する事は日本の鍼灸界が解決して行かなければならない問題についての、全般的な認識を促進することになるであろうと思われる。

【3】この課題に先進的に取り組もうと言う積極的な姿勢を取る者には、次のような問題に明確な見識が必要であろう。それは現在の段階では解答が求められている課題だからである。

- (ア) 経絡治療方式のスタンダード
- (イ) バラック建築を本建築にする作業 小野文恵師・岡田明祐師の発言
- (ウ) クローズシステム化の危険性
- (エ) 脈診法の位置付けの問題
- (オ) 六部定位脈差診の意味は何か、五臓辨脈法・傷寒脈法・奇経脈法などとの関連
- (カ) 治療原則の採択は如何にすべきであるか
- (キ) 証とは何か、歴史的背景と概念形成過程、随証療法とは
- (ク) 『中医証候鑑別診断学』の示しているもの
- (ケ) 立体的な病証把握の方法
- (コ) 諸症状の持つ意味を病の立体構造として構成して認識したか
- (サ) 臓腑辨証・六経辨証・病因辨証・経脈辨証・衛気榮血辨証・三焦辨証・経筋辨証・絡病証の辨証など等をどう統括するのか
- (シ) 『靈枢』九鍼十二原第1の四大鍼法
- (ス) 補法・瀉法・催気法・輸気法・引気鍼法・疎通法・燔鍼法・刺絡法
- (セ) 手技の生理的作用論を考えよう
- (ソ) 穴性・対穴（不謝方）・経絡の性質・臓腑の生理機能論・の把握研究
- (タ) 穴性・経性・臓腑能などの運用、手技の選択と運用、治則の選択論
- (チ) 新しい追加や発見がある時、これを自らの体系の中に然るべく位置付けて取り込めることが大事
- (ツ) 多数の配穴配経原理の位置付けがまだ不明確だ
- (テ) これこそポイントだと言うことがある。
- (ト) 手を作る
- (ナ) 伝える事の出来る世界と自ら悟り開いて行く世界とインスピレーションの世界、これらをどう考えるか

ほかにも種々の問題が有ると思われる。

【4】つまり、『経絡治療』の歴史から導き出された課題に、全面的に解答できるようになると言うことは、鍼灸術が未来医学として、また全面的な臨床医学として、自らを構築し直すという問題を、自らに課した。と言えるであろう。

故に、それは『内経』『難経』の時代のように、医療の主要な担い手の地位を回復しようとしている事に、なっていくもの（歴史の論理として）である事を、予感しているものかも知れないのである。

【5】この為には

(イ) 臨床的な治療システムを、

{a} 全般的な或いは全機能的な調整システムと（五臓的調整、生理的成分の調整、多層構造〈五体論的〉間の調和を企る調整、層別調整、力学的調和を図る調整など）、

{b} 補助的・補充的な調整システムと、

に区分して把握する必要がある。

勿論この両者の関係は {a} を行なえば {b} が不要になっているとか、

{b} を行なったら {a} は不要になる、などの如きものも有りうる関係である。

(ロ) ある方式のみが唯一無二で「正義」なものと言う態度を排除しなくてはならない。これと関連して、ある簡便システムがオールマイティなものであると言う事は有り得ないのが、医療であり治療であるという認識も確立されなければならない。そうで無いと、「A方式」の不備が明らかになったら、「B方式」がオールマイティを主張して交代すれば良いと言うことになりかねない。

これでは、「目クソ鼻クソを笑う」の類に、他ならなくなってしまう。

これでは歴代に涉って蓄積されて来た種々の配穴原理と治則運用原則が空中に棚上げされてしまうことになりかねない。

(ハ) 病態の質に対応した治則が貫徹できる選経・撰穴の原理と、この方針を保証する為に、如何に如何なる手技・手法を用いることが適切であるのか？についての論が確立される必要がある。

(ニ) 表熱には如何なる手技手法をどの経と穴に施すのが適切であるのか？、裏熱にはどうか？、表寒には？、裏寒には？、表虚には？表実には？、皮膚の弛緩・虚軟の熱には寒えには？、筋肉・腱の拘急には？、麻痺には？、知覚鈍麻には？、制御不安や不能やには？、等々のように、また「痰・飲・瘀・火」のような種々の生理的状态・病理的現象に対応する撰穴配経と、それに適応する手技手法の選定という問題に、治療家として準備が常に出来ていることが必要である。つまりは病態・病症に応じた手技・手法の体系が、「論」として構築される必要性がある。

(ホ) 五臓に応じる刺法、五体（体の層的な深さ、皮毛腠理・血脈・筋肉・筋・骨）に応じる刺法、季節に応じる刺法、体成分（衛・気・榮・血）に応じる刺法、衝門（飛門・戸門・吸門・賁門・幽門・闕門・魄門）に応じる刺法、十二経に応じる刺法、絡に応じる刺法、四海・四街に応じる刺法、標本根結に応じる刺法、味覚や嗜好の改善問題に応じる撰穴と刺法など等のように、刺法に要請される課題は多面的であると共に厳

しいものがある。

- (へ) 精密丁寧な歴史的な治法と穴性認識の発達とを研究して整頓を加えるならば、これらの必要に対する解答は基本的には成立している、乃至は有る問題では完成されており、有る問題の場合には基本的な示唆が提出されている。

- (ト) 故に、こういう問題を解決するのは、問題の重要性と意義とを意識して、使命感をもって、文献から課題に応じて必要な処を摘出して行く作業と理論的研究と臨床的研究のためのワーキング組織が、作られて活動を開始する事、これ以外にはあり得ない。この組織のメンバーの資格要件は、漢文・中国文を読める事、最低限『内経』『難経』を読了している事、最低限五年以上の臨床経験がある事、穴性研究や手技手法研究に意欲的である事、研究成果や課題について整理して発表する為の成文化に応じられる事、などであろう。

【6】【7】【8】【9】【10】～～未完